

武蔵野日曜集会

救の確証

——ローマ書第5章1～11節——

1978年4月9日(武蔵野)

小池辰雄

自分を否定して 平安 希望 空気の中に包まれて 捨身の態勢 いやいよ身について来る
希望の確証 救いの確証 ヒルティの詩「完成」 贖罪愛の死 永遠の今 聖書は全存在的に
読む あるがままの自分をキリストの中に捨てる

【ロマ5・1～11】

1 斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリストに
頼り、神に対して平和を得たり。2 また彼により信仰によりて今、立つところの恩恵に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。3 然のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、4 忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。5 希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり。6 我等のなお弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて敬虔ならぬ者のために死に給えり。7 それ義人のために死ぬるもの殆どなし、仁者のためには死ぬることを厭わぬ者もやあらん。8 然れど我等がなお罪人たりし時、キリスト我等のために死に給いしに由りて、神は我らに対する愛をあらわし給えり。9 斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんに、まして彼によりて怒より救われざらんや。10 我等もし敵たりしとき御子の死に頼りて神と和らぐことを得たらんには、まして和らぎて後その生命によりて救われざらんや。11 然のみならず今われらに和睦を得させ給える我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり。

●自分を否定して

1節から5節までの中に、もう福音の一切があると言っていていくらいです。

1 斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、

「このように私たちは信仰によって」と。この「によって」というのは「ディア」(によって)でなくて「エック」(から)という字が書いてある。「信仰が元となって」という意味で、単なる手段ではない。「信仰」というのは、「キリストを信受したこと」によって、信仰の対象は——信仰の主体は、と言った方がまだいいかも知れない——これはキリストであります。



キリストという信仰の主体、それが元となって義とされた。どうも、「信仰により」というような言葉が、とかく信仰が何ものであるかの如く考え違いをする。「私はまだ信仰が弱いものだから」なんて、そういうような気持ちで信仰という言葉をつまえてはいかん。申し上げている通り、

「アブラハム、エホバを信ず―エホバにアーメンと言いました―そうしたら、
義よしとされました」

というのが歴史的な信仰の一番基本の事実です。自分を否定して、神さまを100%に然りとする。そうしたら、義と言われた。自分を否定しなければ、義と言われない。人間はみんな自己肯定、自己弁護者です。ところが、自分を没却する。そうすると、それが信。自分を否と言ったことを義とされる。これが義ということ。しかも、この場合は旧約と違って、信仰の対象、主体がキリストですから、「義とされる」ということは、

「キリストの義がやってきた、義を与えられた」

ということ。このことがマルチン・ルターの宗教改革の土台になったわけです。

1……我らの主イエス・キリストに頼り、

これは正にキリストが媒介者です。

神に対して平和を得たり。

この「に對して」という言葉は、

「はじめ太初ことばに言あり、言は神ともと偕ともにあり」

の「と偕に」(プロス)と同じ字が使つてあるので、「對して」というと何か対立したような気持ちに、日本語としてはヘタするとなる。この「對して」は神さまと対面の気持ちです。神さまと一体的に、神さまと一緒に、神さまと対面というようなわけです。

●平安

「平和」というのは、みんなは「平和」と訳すんだけど、私は「平安」と訳したい。申し上げている通り、平安というのは縦の関係です。神さまとの関係は縦ですから、縦の関係が平安で、人間同志の横の関係が平和です。ヘブライ語の「シャローム」という字は両方に使いますが、最初は、「平安」という言葉は縦の関係なんです。「シャローム」というのが最初に出てくるのは、士師記6章23節、

「²³エホバ之にいたまひけるは、心安おそかれ怖なかるる勿なかれ、汝死おそぬることあらじ。

この「心安かれ」という言葉です。

²⁴ここにおいてギデオンか彼所こにエホバのために祭壇を築き、之をエホバシャ

ロムと名づけた。是は今日に至るまでアビエゼル人のオフラのに存のる。」(士

師記6・23～24)

この「エホバ・シャローム」というのは「平安の神」ということ。これが「平安」なんです。



神の平安が臨んだ。

「¹²エホバの使^{つかい}これに現れて、剛勇丈夫^{ますらたけお}よエホバ汝^いとともに在^{いま}すといいたれば」
(士師記6・12)

とある。「エホバ汝とともに在す」というところに平安があるんです。これが「プロストン テオン」「神と偕^{とも}に」なんです。平安を与えたのはキリストなんです。キリストによって平安が来たんですから。そういう関係に平安があるわけです。キリストを通さなければ、平安は来ない。これを信受すると、そこに義がある。

●希望

²また彼により信仰によりて

同じことを、キリストを主体とした言い方と、信仰というこちら側の言い方を二つ言った。「キリストにより、信仰により」とは、別な言葉で言うのと、「恩恵により」と言ってもいい。

²キリストにより信仰により今、立つところの恩恵^{めぐみ}に入ることができた。

と。即ち、キリストは恩恵の主体ですから、キリスト自身が恩恵そのものなんだ。もう、言葉は全部、有機体的に関連している。分析・総合ではない。有機体的な、一如からいろんなものが展開してくるだけの話です。

²……神の栄光を望みて喜ぶなり。

「神の栄光」というのは、「神さまから与えられるところの栄光」ということ。恩恵の現実、恩寵の現実ですから。

「神から与えられるところの栄光を望んで喜んでいる」

と。今度は希望だ。こういう事態は、希望という恩恵は歴史に一回生じて、今も続いている。とにかく、キリストというのは、恩恵が過去において完了している。完了しているけれども、恩恵は持続するんです。これは信仰の対象としてのキリストが、過去において事実を發揮して、今現在にもちろん働く。それから今度は希望でしょ。この信仰の現実に来たら、希望は未来、正に来たらんとする将来、それは栄光を望んでいる。希望の保証となっているのがこの信の現実なんです。神の栄光を望んで喜んでいる。将来のことに對して望みを持って喜んでいる。待ち望んでいる。

³然^{しか}のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、

本当に生きようとする、患難は必ず来る。患難がなければ、本当に生きていないことになる。この曲がった世の中、罪の世において、また自分自身の罪との戦いにおいて、患難はつきものです。およそ本当のことは患難を通さないと生じない。ベートーヴェンも

「患難を通して歓喜へ」

と言った。ダンテもあれだけの患難を通して、自分の詩のことを「喜劇」だと言った。本当は悲劇を通っている。患難をなぜ喜べるんですか。それはキリストを信受しているから、



キリストの力が来ているから。だから喜べる。患難に打ち勝つことができるから。

●空気の中に包まれて

ここに花がある。これは太陽の光と土の養分を受けて、空気から吸うものを吸って、このように生きている。この姿は全部、受けとっている姿なんです。神の恩恵を全部、受けとっている。自分で大きくなっているのではない。自分で咲いているのではない。だから、人間も、受けているなら本当の受け方をしろ、ということですよ。本当の受け方をしたのはキリストなんです。神さまを100%に受け取ったから、あれだけの凄いことになった。だから、信仰の世界は受けるという「受」が大事です。恩恵の力を受ける。

私たちは空気の中に包まれて、空気を吸って肉体は生きている。これがなければ、どうにもならんでしょ。誰もが眠っていても吸っている。無意識で吸っている。空なるものが、気なるものが最も価値がある。ダイヤモンドと空気とどちらを取りますか。ダイヤモンドを取る人は死んでしまう。空気を取る人は生きる。そういう完全に恩恵でもって生きているんだ。大自然の恵みで。

いわんや、我々の魂は、神の恩恵において、神の力で、神の霊気で生きている。そのことになぜ気がついてくれないか。信仰もヘッタクレもないんですよ、気がつけばいい。気がついたら、俄然凄いことになる。

「私は何もなかった。本来、無者だった」

と。我々は本来無一物です。これは我がものというものは一つもない。本来無一物に気がつくつくと、神さまからやって来るその力、その恩恵が、今度はそれが土台となって、神さまと一緒に、創造的な人になってくる。

神さまは最大の芸術家です。誰がこんな生けるものを造れますか。その最大の傑作は人間です。この神さまの最大の傑作の人間が一番やつかないことになっているとは、何ごとかと言うわけです。神霊の止ま^{とど}まっているのを霊止^{ひと}というんだが、神霊がとどまっている人が何人いるかというわけです。

もうクリスチャンはいい加減なことでは、クリスチャンではありませんよ。キリストに直結している者、キリスト者という一番激しい意味は何にも説明がいらぬ。キリストのものなんだから、キリストと一つなんだ。そのようにキリストを100%に質的に受けとつていれば、力が来るから、患難をも喜ぶということですよ。何でもござれということになる。

●捨身の態勢

木喰^{もくじき}にしる、円空にしる、向こうではロダン、ミケランジェロ。これが捨身の態勢でやっているわけだ。それはもう、キリストの力が来たら凄いことになる。棟方志功の自叙伝を讀んでごらん。火が燃えているような言葉だ。「絵馬鹿」と自ら称している。自分は絵に全



身を打ち込んでいる馬鹿者だと言っている。何でも気狂いみたいに、馬鹿みたいにならなければダメなんですよ、本当の世界は。とにかく、命がけで打ち込んでいるものは、みんなどの世界でも本当だね、学問であろうと、事業であろうと。その打ち込む力のもと、キリストみたいなのに、先ず神の中に自分を投げ込むことなんです。まずキリストの中に自分を投げ入れること。

もう、それでなかったなら、これからは大変ですよ。21世紀は無事に来るかわからないような世の中です。どういう現実になろうとも天界に天翔ける^{あまが}ような魂になっていないと。体裁のキリスト教では絶対ダメです。

だから患難を喜ぶ、「いや、何でもやって来い」と。喜べる実力があるから。キリストは、「わが荷は軽し」

と言う。ロマ書8章でパウロがまた絶叫している。

³然^{しか}のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、

患難によつていかに耐え忍ぶことができるかと。一番耐え忍んでいるのは神さまだ、天界のキリストです。「忍」という字は「刃^{やいば}」の下に「心」と書く。いつ刃で切られようとしても、そういう心備えが「忍」という字です。漢字というのは凄^{あま}い意味を本来持っている。要するに、彼らはみんなギリギリの現実でもって——空手だつてそうだよ、「窮すれば通ずる」というけれども——本当に相対界に絶すると凄^{あま}いことになる。相対的なもので満足しているうちは、人間は本ものにならない。

●いよいよ身につけて来る

⁴忍耐は練達を生じ、

「練達」というのは、それでもって本当に鍛え上げられることです。「マイスターシャフト」(職人親方、師匠)だね。実力の確証です。試煉に耐えて、それがちゃんと実力として発揮する。それが練達、「マイスター」(達人、親方)。ドイツ語を生徒に教えるときに、

「ウィーブング マツハト マイスター」

「練習は達人を生ずる」

と一番最初に教えてやると、みんなびっくりする。とにかく、何でも練習しなければダメだ。繰り返してやれ、それでなければ身につかないぞと。練達はその道の達人をつくる。

⁴……練達は希望を生ずと知ればなり。

いやむしろ、練達は希望の保証であります。保証、確証。一体、何が練達ですか。みんなキリストの力ですから。キリストの力がいよいよ身につけて来ることが練達なんです。よく、天才に聞くと、

「自分の九十何パーセントは努力であつた」

と言う。ゲーテも、エジソンも、アインシュタインも、努力だ。努力というのは一生懸命



に練習して練達したこと。本当に受けとるといふと、創造力が出るんです。受け放しではない。入って来るものは凄いんだから。創造的な神の力だ。だから、同質的に創造的に出てくる。よく、教えるときに、「よく考えろ、自分で工夫しろ」と言う。けれども、よく考へたり、工夫する前に、本当に学ぶことをしなければダメなんです。また、一流のものを——模倣と言ってはちよつと語弊もあるけれども——それを真似ること。とにかく、受けとる角度が本式になってくると、今度は創造的な工夫も、また創造的な考えも出てくる。

●希望の確証

5 希望は恥を来らせず、

希望は願望ではない。希望は上から来るんだ。だから、絶対にこれは恥をきたらせない。必ず希望は実現する。現象としてどんなに実現しないように見えても実現している。これが根源現実と申し上げているところです。内なる世界でもって現象してくる。

「御国をきたらせたまえ」

という祈りは、既に御国が来ているから祈れるんです。キリストという御国の主体が来ているから。だから、「希望」という言葉は、別な言葉でいうと、「御国」という言葉なんです。「神の国」の到来を望み、そして自分が御国の一員とされること。これが希望の内容だ。人生はこの地上ではせいぜい百年です。何歳まで生きたって、高がしれている。あと百年たてば、ここににいる人はみんな「向こう側」だよ。向こう側を約束されている。だから、向こう側に、「天界」における希望がなかったら、つまらんですよ。その希望の確証はキリストを受けとることによって。

「神の国は汝らの中にあり」

とキリストがハッキリ言われた。希望の確証は既に汝らの中に来ていると。

5 希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり。

ロマ書5章5節は、今日学ぶところの焦点です。

「我らに賜いたる聖霊によりて神の愛が我々の心に注ぐ」

とある。

「何となれば、神の愛は、我々の心の中に与えられたところの聖霊によって、注がれたのである」

と。これは受け身の完了形だ。心に、ハートに、聖霊によって神の愛は来たというんですから。聖霊は正に一番深い意味において愛の霊です。

「聖霊の最初の名は愛である」

と、トーマス・アクイナスが言った。正直、我々は御霊のバプテスマを受けると、天来の愛で歓びに満ちて来るから。そうして、この愛は力を持っている。単なる感情ばかりでは



ない。力がある。

●救いの確証

救いの確証は、こちら側から言うならば、この聖霊が注がれたということ。あちら側で言うならば、キリストという恩恵の実体です。これは圧倒的に臨んで来るところの絶対、恩寵の実体ですから、キリストは救いの土台です。それが本当の確証であるのは、この聖霊が注がれることにおいて。本当の意味における信義ということ、十字架の贖罪を受けることと同時に聖霊が入って来るということだ。本当は、寸分ズレのない話なんだ。

ペンテコステの聖霊の注ぎ。パウロは本当にダマスコ途上でキリストの霊に撃たれて、それから聖霊のバプテスマを受けて、

「わが目より鱗うろこの如きもの落ちたり」

と、ハッキリ新生しました。キリストを100%に受けとって、

「我はキリストの僕なり」

と言った。キリストの僕は、本当の自由なるパウロであった。もうハッキリしてるんですよ。本当の僕となる人が本当の自由者なんです。その僕の姿を知らないで、自由だの自主だの言ったって、これは自我が立っているだけの話です。もう問題だらけで、今の民主主義なんてどうにもならない。神主しんしゅという、神が主に立っていないものだから、身勝手主義の民主です。

あなた方一人びとりは非常に責任重大ですよ。使命重大です。しかし、力むことはない。キリストの中に投じて行けばいい。

「南無キリスト！」

と言って、毎日、キリストの中に帰入して行く。患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生ずる。キリストの練達者となる。キリストの福音のマイスターシャフトをキリストから受けとってください。

神の愛、キリストの愛が聖霊を通してやって来た。主の愛は自分を貫いて展開せざるを得ない愛です。キリストの愛は展開してやまない愛ですから。そういうことで、ここには「信と望と愛」が出ています。信仰と希望と愛が。パウロがコリント前書13章で言っていることが、これがちゃんと、13章よりハッキリとした構造において言われている。コリント前書13章はその構造も何も書いてない。ただ、「愛は、愛は」と言っているだけ。あれは聖霊の愛です。人間の生まれつきの愛ではない。でなければ、愛は

「おおよ凡そ事忍び、おおよおおよそ事信じ、おおよおおよそ事望み、おおよおおよそ事耐うるなり」(コ

リント前書13・7)

なんていうことは言えない。私は「愛は担いぬき、信じぬく」とか訳しますけれども、それはなぜ貫けるかというと、キリストの力が貫いているからです。



●ヒルティの詩「完成」

ヒルティの『眠られぬ夜のために』を私は抄訳しましたが、その4月15日のところに、ヒルティの「完成」という詩がある。

完成

踏破されたり、なんじ、つらくしてけわしかりし道よ。

なんじ、月をへ、年を重ねし不安の旅路よ。

キリストの血による恵みを、この身親しく

われうけざりせば、はやくも踵くびすを返せしならん！

しかり、血に報ゆるに血！ 地獄はしよせんまぬがれず、

現世うつしよはおのが宝をやすく放たず、

贖あがないしろ代は大にして資力およばず！

かくてはだれか自由をかちえん。

自由をえんとせば、自由に死せよ。

なんじ、身をゆだねて神のしもべたれ。

これが報いはここにては日々の糧かて、

かしこにして永遠とわの霊たまに永遠とわのいのちぞ。

かくてなんじは自由なり、されどただ一つの軛くび、

愛のきずなの強くなんじをしばるあり。

かつて思いもよらぬ道なれど、さりながら――

人生のさちとめあてをなんじは見いでぬ！

小道はややに登りゆく、なおくあきらかに、

うたがいもふりむきも歩みを止めえず、

けわしき道も深き淵ふちもあやうきをおびやかしえず、

狭霧さきりもめあてをくらましえじな。

日はあかあかとさし上り、

そのよろこびの光もてなんじを照らす。

主よ、救い主よ、なんじにこそ感謝をさせよ、

なんじわがために血をあえてそそぎたまひし。



己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。」(ヘブル 9・11～12)

という非常に決定的な言葉です。これは相手がユダヤ人だからこういう書き方をしている。こここの「至聖所」とか「幕屋」は、神殿の至聖所や幕屋のことだけれども、これを言っている人は十字架のことを指している。贖罪はもうこの一回で全うされている。その贖罪の啓示的な事実は、歴史的には相対的歴史の一つの事実だけれども、それは啓示的な絶対的な事実です。私たちに現在の響いてくる事実なんです。現在の響いてこない事実では、神の国の事実ではなくなってしまう。

●永遠の今

信仰の事態はすべて現在に集中して来るんですよ。過去のこと、今のことも、未来のことも、キリストの十字架という具体的な事実は過去から現在に迫ってくる。愛は上から聖霊を通してやってくる。希望もまた将来からして現在に化してくる。みんな現在です。これが永遠の今ということ。過去・現在・未来が終末的現在で一つになっている。終末的現在だから、歴史の終末が今、私たちの中に来ているんです。だから、いつ倒れても

「アーメン ハレルヤー!」
と、天界へ往つてしまう。まず、大変なことです。

これは時間的な話ですが、今度は空間的に言うと、天界と現実界(地界)と地獄界の三つもまた、煉獄の現在(地上の現実界)において一つになっている。

「御意の天になるごとく、地にもならせ給え」

という、天界を地界に持つてきてしまう。天地一如になる。地獄の中も、こちらへ救い上げていくような、そういう現在です。

キリストは地獄まで下りて行ったんだから。ダンテも三界を遍歴させられた。何と言つても詩の中ではダンテの『神曲』は最高と言つていいと私は思っている。あの地獄篇、煉獄篇、天国篇を彼は流竄るせんの19年、血と涙をもつて書いた。

9 斯く今その血に
キリストの血に

頼りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒より

神の怒りより

救われざらんや。

神の怒りは審判です。贖罪愛によつたから。神さまは全部、審判をキリストの十字架に持つて来てしまったから、私たちは無罪放免にされてしまった。そういうことに感激しなかつたら、信仰は観念信仰になつてしまう。



●聖書は全存在的に読む

聖書は全存在的に読まなくては。日蓮の言葉でいうと「身読」です。「体読」とも言います。あるいは、「色読」とも言う。具体的な現実として読むことを「色読」という。本当は読むのではない。聴くんです。聖書は響きを聴く。聴くのも耳で聴くのではない。全存在で聴く。また、キリストに捕らえられる。ザビエルは日本語を知らなくなつて、伝道したら、みんな彼らは回心してしまった。これはザビエルの言葉から発するところの霊的な響きにうたれるからです。

皆さん、本当にキリスト一点張りになつてください。何をしても、それですから。もちろん、人間的、相対的努力や勉強は大いにやつてくださいよ。しかし、その根源はみんなそれによつて力づけられ、展開して行くんですから。もうハッキリしている。文化文明なんて言つたつてダメだよ、根つこの世界がなかつたら。「根性」というのはそうですよ、根つこの性と書く。本当の根性というのは、この福音を受けなければ本当の根性は出てこない。私が「無」なんて言うのと、何も無いかと思つている。冗談じゃない。無量なるものが来ている。言葉というものはすぐ誤解されるから困る。

10 我等もし敵たりしとき

神さまやキリストの敵でサタンの味方をしていたような時に、

御子の死に頼りて神と和らぐことを得たらんには、まして和らぎて後その生

命によりて救われざらんや。

「神と和らぐ」なんて妙な言葉だ。これは「贖い」という言葉と同じ言葉です。「和解、和睦」なんていう言葉が書いてあるけれども、こつちから和解ができるのではない。神さまの方から和らぎの、贖いの事態を展開してくださつたんですから。間違えては困る。それはキリストがやつてくださった。神の審判を受けとつて、そしてキリストが和のことをやつてくださった。だから、「贖い」と「和らぎ」は同じことなんです。我々が何か偉そうな顔して神さまと和睦したようなことではない。冗談じゃない。我々には和睦なんかする資格なんかありません。

●あるがままの自分をキリストの中に捨てる

11 然のみならず今われらに和睦を得させ給える我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり。

「神の中で(エン・テオー)喜ぶ」と書いてある。本当の世界は「の中」の世界です。中へ入らなくてはみんな観念だ。「神・キリスト・我」の、そういうような一如の世界がキリストの本願の事実をもつて来ているのが、これが救いの確証というわけです。そこには本当の信も与えられ、愛も与えられ、みんな与えられてしまう。こつちからはよく、「己を捨てろ、捨身でかかれ」と言うね。どこへ捨てるんですか。キリストの中へ捨てればいい。あるが



ままに。

「霊的」とはどういうことか。あるがままの自分をキリストの中に棄てる。キリストの十字架という門を通って入る。中に捨てる。ハイデッカーの言葉でいうと、「投ぜられたる存在」だ。我々はこの相對界に投ぜられたる存在だけれども、逆に我々はキリストの中に自分を投げ入れるところの存在です。これが本当の「求め」なんです。

「私を求めなさい」

ということば、

「私の中に入って来なさい」

ということだ。

「我を求めよ。さらば、与えられん」

というのは、

「私の中に入ってきなさい。そうすれば、私自身をお前にやるぞ」

と言うんです。「求めよ。さらば与えられん」というのはそういうことですから。お願いの前に、自分を投げ入れなければ、お願いが本当のお願いにならない。本願の角度にならない。キリストの本願が言うんです、

「私の中に投げ入れなさい。そうしたら、お前は凄いいことになるぞ」

と。「求めよ。さらば与えられん」というのは、キリストが求めているんです、私たちを。

「私はお前をこんなに求めているではないか。なぜ、私のところにやって来ないんだね」

と。

どこへ行っても、私は自分をぶちまけてものを言ってます。だから、聴く人は驚くんです。水を割らないから。皆さんも、どうぞ、そのようにやってください。そうしたら、人間の魂は本ものには感ずる。体裁なものではダメなんです。そういうことで、時々、私はパウロの言葉もまだるっこくなってしまうんだ。どうぞ、眼光紙背に徹する、その文字の後からの響きを受けとるような読み方をしてください。

